

『識字神話をよみとく 「識字率 99%」の国・日本というイデオロギー』
角 知行、明石書店、2012 年

おやさと研究所教授
堀内 みどり Midori Horiuchi

本書の著者、おやさと研究所の研究員でもあった角知行氏（天理大学人間学部教授）の専攻は社会学で、特にメディア論や識字研究に長年にわたって携わっている。本書出版後、研究所の第 253 回研究報告会において、『識字神話をよみとく』をよみとく」（2012 年 10 月 18 日）として研究報告を行った。

さて、手近な国語辞典で「識字」という単語を引いてみると、「文字が読めること。文字の読み書きができるようになること。」とあり、「一運動」「一率」という熟語例が載っていた。識字率についてユネスコは「総成人人口（15 歳以上）に対する推定成人識字者の割合を百分率で表したもの」としているが、識字者の定義は国や専門家によって異なり、自分の名前が書ける程度、簡単な文章が読み書きできる程度、日常生活に必要な読み書き計算ができる程度などさまざまある。ユネスコでは、「日常生活で用いられる簡単で短い文章を理解して読み書きできる 15 歳以上の成人」としている。『現代教育史事典』（久保義三他編著、東京書籍、2001 年）の「識字運動」の項目では、「政府統計では、1960 年時点での 15 歳以上の非識字者は、人口比 2.2%（男 1.0%、女 3.3%）とあるが、近年はデータがとられていない」と記述されている。

本書では、こうした高い日本の識字率の実態はどのようなものだったのかという基本的な問いを立て、「識字率の神話」「漢字の神話」「識字学習の神話」という 3 つ（全 8 章）の視点からの応答となっている。著者は「識字神話を主題として論じる」と最初に本書執筆の目的を述べ、以下のように続ける。

この本を手にとったくださった人のなかには、識字に関する本や論文はあまりよんだことがない、という人もいることだろう。「識字率 99%」の日本にそもそも識字問題は存在するのか、と疑問をいだく人もいるにちがいない。そこで、序として、識字について概説的な解説をしておきたい。内容は、識字の定義からはじめて、識字神話の紹介にいたる。（7 頁）

著者は、識字（リテラシー）とは「社会関係からみた、文字のよみかきの実践のことである」（7 頁）と定義する。これは 1980 年代以降の英米の社会言語学が、識字を能力や技能ではなく、実践や活動としてとらえようとしていること、識字を文脈の影響下にあるものとして社会関係のなかに位置づけようとしているという識字研究にならったものであるという。

本書の柱となっている「識字率の神話」「漢字の神話」「識字学習の神話」の「神話」は、元来世界や人類の起源に関する物語であるが、それが転じて大衆にまでひろく信じられるようになった言説を指す。言説とはある対象についてかたられた体系であって、「識字率の神話」とは、「日本の識字率は 99%であり、世界一である」「日本人はみな新聞が読める」といった言説が日本人や日本の教育制度の優秀さを示すものとして、ひろく信じられてきたことをいう。これに対して、著者は「はたして本当なのか」と、いくつかの公的な統計などを用いてその真偽を探っていく。その結果、実際には新聞を読む能力に限界のある人がかなり存続してきたことが明らかとなる。

また、言語学的な装いで、漢字とかなとが混じる日本語の優

秀さを説く言説に対しては、学術基本用語を例にして論じ、現代の漢字擁護論のイデオロギー的な基盤を明らかにしようとする。

さらに識字学習が非識字者を解放するという議論へとつながっている「識字学習の神話」については、たしかにそのような現実はあるが、それ以外にもある識字学習の側面に目を向け、識字作文をエスノグラフィー研究の素材として取り上げている。そして、「識字学習の神話」批判だけに留まらず、「識字のエスノグラフィー研究」という方向性を提案している。

「神話という言説を分析し批判したところで、それはボールをとりさるだけの効果しかない。しかし、『識字問題はない』という観念が強固に存在する場所では、識字研究は、神話の解体からしか出発できない」（37 頁）と、著者は語る。

本書は、序および第 1 章が書き下ろし、第 2 章から第 8 章までは、『識字の社会言語学』（生活書院、2010 年）および学内外の学術雑誌で発表された論文がもとになっている。著者が識字に関心を寄せるようになった当時、天理大学に留学していたネパールの学生がいた。彼はネパール語、ネパール語、ヒンディー語、英語を話したが、日本語については悪戦苦闘ともいえるべき苦勞をしていた。その彼と一緒に学ぶことによって、留学生にとって漢字かな混じりの日本語がいかにカベになっているかを共体験したという。のちに著者は日本語教師の資格を取得し、日本語ボランティアを断続的に続けているが、そうした体験を通じた事実が識字研究や本書の根底には横たわっていることと感じられた。

本書の主な目次は、以下のとおりである。随所で「目から鱗が落ちる」体験ができる。是非、その体験をお勧めしたい。

序 識字とはなにか

第 I 部 識字率の神話

第 1 章 公式統計にみる日本の識字率—「識字率 99%は本当か」

第 2 章 新聞を読む能力—「日本人の読み書き能力調査」（1948）の再検証

第 3 章 限界的識字者のプロフィール—日米の調査から

第 II 部 漢字の神話

第 4 章 漢字は意味をあたえるか—学術基本用語の場合

第 5 章 教科日本語における漢字のカベ

第 6 章 漢字イデオロギーの構造

第 III 部 識字学習の神話

第 7 章 識字研究法としてのエスノグラフィー

第 8 章 識字社会における支配と対抗

